

Title	留学生を対象とする日本語教育における教師の専門知：実践の中の教師の学び・変化・成長についてのナラティブ的探求
Author(s)	李, 暁博
Citation	大阪大学, 2004, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/45715
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名	李 曉 博 リ キョウ ハク
博士の専攻分野の名称	博 士 (文 学)
学位記番号	第 19010 号
学位授与年月日	平成 16 年 9 月 24 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当 文学研究科文化表現論専攻
学位論文名	留学生を対象とする日本語教育における教師の専門知—実践の中の教師の学び・変化・成長についてのナラティブ的探求—
論文審査委員	(主査) 教授 青木 直子 (副査) 教授 真田 信治 助教授 渋谷 勝己

論 文 内 容 の 要 旨

本研究は Narrative Inquiry (ナラティブ的探求。以下 NI) という質的研究手法を用い、一人の日本語教師の専門知の様相を、ほぼ一年間にわたるフィールドワークによって収集されたデータをもとに明らかにしようとするものである。

本論文は、序章と終章を含め、16章から成っている。序章では本研究の関心のありかを述べた後、フィールドワークからフィールドテキストの作成、フィールドテキストからリサーチテキストの作成までの方法論的な過程に言及し、本研究の特徴、目的と意義が説明される。第1章では、申請者の「学び、教育、研究」にまつわる個人史と、フィールドに入る前の「リサーチ・クエスチョン」について述べている。第2章では、本研究の関心と深い関連をもつ教師研究の歴史的流れを整理した上で、本研究で用いられた NI という研究方法が研究史の中でどのような位置を占めるものであるかについて論じている。第3章では、調査のフィールドとなったある大学のキャンパス、教室、非常勤講師室の物理的な描写が行われ、その大学で非常勤講師をする研究参加者のプロフィール、また彼女のクラスに出席する留学生たちについても述べられる。第4章は、研究者のフィールドへのエントリーにまつわる問題が検討される。申請者は、自分と母語を同じくする留学生たちの抱える学習上の問題を知り、客観的な観察者に徹するべきか、研究参加者である教師にそれらの問題を伝えるべきかという葛藤を経験する。この葛藤を経て、研究者がフィールドの一員として授業という営みに参加し、そこにいる人々と積極的に関わっていくという NI の特徴を申請者が実体験として学んでいく過程が描かれている。第5章と第6章では前期の授業の様子がストーリーとして記述される。ここでは、教師の意図の通りに授業が進行しないという問題を解決するために試行錯誤する中で、研究参加者である教師が次第に学生たちの実情を把握していく過程を描いている。第7章では、前期のカリキュラムをめぐる様々なストーリーの裏にある研究参加者の思考を改めて探り、それを教育における理論と実践の乖離という問題に関連付ける。第8章は、研究参加者が日本語教師になるまでの歴史、経験、及び、彼女自身が経験した外国語学習などについての語りから、それらが彼女の教師としての考え方にどのように影響しているかを探る。第9章では後期に入って初めての授業について書く。学生の現実を直視し、そこから出発した授業をしようという研究参加者の決断が、学生の積極的な授業参加を引き起こし、教室風景を前期とはまったく異なるものにしていく様子が描かれる。第10章では、研究参加者の関心の変化について探る。学生の日本語学習面の問題を把握した彼女が、それらの問題と学生たちが生活者として抱

える問題との関連に気づき、教師としての自分の役割について改めて自分を振り返る様子が描かれる。第 11 章では、一人の学生の生活者としてのストーリーと研究参加者の教師がそれにどのように関わったかについて記述する。第 12 章では、研究参加者が追求してきた「心のある流れの授業」が実現した、後期も終わりに近い授業のストーリーが語られる。第 13 章はこのクラスの最後の授業を取り上げ、教師と学生の別れを記述するとともに、研究参加者と申請者が一年間の実践を振り返って話し合ったことについても報告される。第 14 章では、研究のプロセスで申請者が抱えていた「プロの日本語教師とは何か」という問題を、理論的なレベル、研究参加者の実践のレベルから論じている。そして、終章では、研究者である「私」が「この研究」を振り返り、「研究」を通しての「私」の学び、変化と成長について記述する。そして、この研究が、中国語を教える教師としての申請者の実践にどのように影響し、それをどのように変化させたかというストーリーでしめくくっている。

論文審査の結果の要旨

本論文は、教師の実践知はナラティブであるということを前提に、敢えて論理実証型のアプローチをとらず、フィールドでの出来事をストーリーとして語り、研究参加者の教師の語りをナラティブとして呈示する、日本語教育研究においてはおそらく初めての試みである。長期間、ていねいなフィールドワークを行って膨大なデータを収集し、それをもとに極めて厚い記述を行ったところは高く評価できる。授業という複雑な営みを複雑なままに描いたこの論文から読み手は自分の関心や経験によって様々なことを読みとるだろうが、それが読み手の内省を促し、教育に対する考え方や授業実践を変えさせるであろう力強さをこの論文はもっている。そうした意味で日本語教育の現場への貢献度は非常に高い研究であり、日本語教育における教師研究、教師教育の方法論にも重要な知見を提供している。

本論文の問題点としては、NI の限界がまったく論じられていないという点が挙げられる。まず、この手法は自己開示をいとわず、自らの実践を内省する用意のある教師しか研究の対象にできない。そうではない教師たちが実践の中で作っていく知はどのようなものであるかは、おそらく NI では知ることはできないであろう。また、研究参加者との深い関わりを必要とする NI はフィールドにいる人々すべてについて詳細な記述をすることが難しい。本論文でも、教師の内面に深く入り込んだ記述と比較すると、学習者の描写が表面的なものに留まってしまった感は否めない。また、研究参加者だけではなくフィールドの人々すべてとの関わりを必要とする NI では、それらの人々への批判的なスタンスで論文を書くことに倫理的問題を伴う。本論文で研究参加者が経験した授業運営の困難の背景にあると思われる構造的問題が充分議論されていない印象を与えるのは、おそらくそのような配慮によるものであろう。このような本論文の限界にも率直に言及すべきであったと思われる。しかし、これは本論文の価値を大きく損なうものではない。よって、本論文は博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。